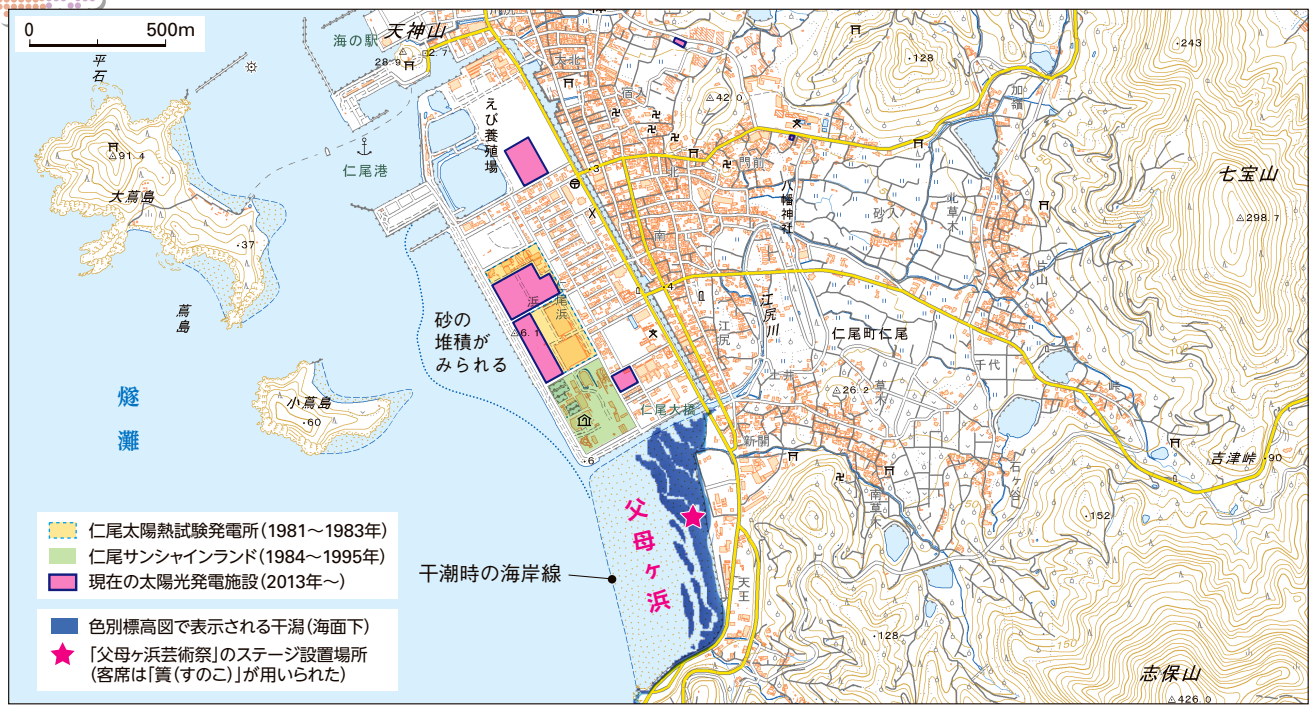
日本縦断 地理院地図の旅

第６回「月と太陽がもたらす景色－香川県・父母ヶ浜－」



地図1　父母ヶ浜周辺の電子地形図 25000
（2020年12月6日調製，90％縮小，一部改変）

1.「日本のウユニ塩湖」・父母ヶ浜

香川県三豊市仁尾町に，父母ヶ浜という全長約1kmの砂浜海岸がある（地図1）。干満の差が大きいため，干潮時には約500mの幅に渡り干潟が姿をあらわすが，満潮時には海面下に没する。海岸の傾斜が緩やかであるので，潮が引いた時に干潟に取り残された海水が鏡のように空の景色を反射する。干潮と，風が凪ぐ日没が重なる時期には，夕日に照らされた水面が特に美しく見える。その美しさが2017年ごろからInstagramなどで話題になり，多くの観光客を集めている（写真2）。2020年10月31日には，この条件に加えて月2度目の満月（ブルームーン）とハロウィンが46年ぶりに重なり，海岸では「父母ヶ浜芸術祭」の開幕を飾るライブが開催された。

2. 父母ヶ浜が観光地になるまで

降水量が少なく日照のある瀬戸内の気候に恵まれた香川県では，古くから塩田が多く作られていた。干潟のある仁尾町では，天保5年（1834年）に塩田忠左衛門により，干満を利用した入浜式塩田が作られ，明治から昭和にかけて干拓地が整備され，製塩業が発展した。昭和32年（1957年）には，より大量生産できる流下式塩田に転換したが，昭和47年（1972年）に塩田は廃止された。

その後，干拓地にサンシャイン計画の一環として昭和56年（1981年）に世界初の太陽熱発電所が作られ，仁尾太陽博の開催により町は賑わった。しかし，太陽熱発電所は思うような出力を得られず，約2年半で試験発電は終了した。太陽博会場の跡地に遊園地「仁尾サンシャインランド」が作られたが，平成7年（1995年）に閉園した。

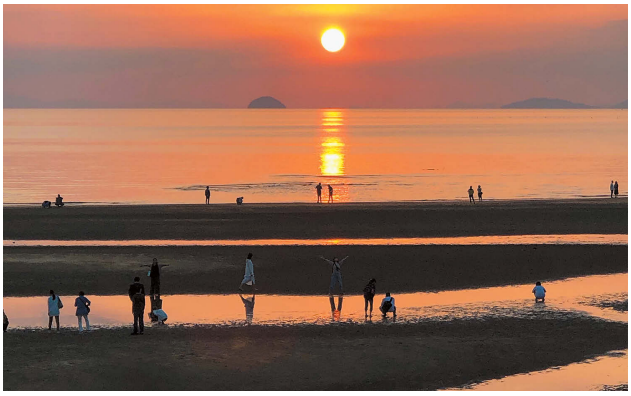


写真2　父母ヶ浜の日没（2020年10月18日，撮影：溝口和彦）

同じ頃，父母ヶ浜には沿岸流とともに瀬戸内海からのゴミが漂着して荒廃し，町の事業として，父母ヶ浜も埋め立て，遊休地と化した干拓地とともに工業用地として開発する計画が立ち上がった。しかし，地元の有志により，美しい砂浜を取り戻す清掃活動の輪が広がり，開発計画は中止となった。清掃活動から広がったコミュニティの結束が，父母ヶ浜を観光資源へと甦らせたことは，「里海」づくりの先進事例として評価されている。また，太陽熱発電所の跡地には太陽光発電所が2013年（平成25年）に運転を開始した。父母ヶ浜と仁尾の町は，今も月と太陽の恵みのもとにある。